



明善同窓会報

MEIZEN-DOSOKAIHO

第54号

明善同窓会
電話(0942)33-6546
FAX(0942)35-1249
編集 広報委員会
〒830-0022
久留米市城南町9番地の1

今年の特集記事は昨年二月五日から三月一四日まで福岡県立美術館で開催された「2つの美術山脈・修猷館と明善に集った美術家たち」展から同館より掲載許可をいただき、図録より抜粋して明善を主にして掲載した。

修猷館と明善。現在、県立高等学校として存在するこの2つの伝統校は、いずれも江戸時代中期に設置された福岡藩および久留米藩の藩校を起源としています。明治維新の中断期ののち、ともに明治十年代に県立学校として創立され、その後、度重なる改称や学制改革を経ながら百三十年の歴史を重ねてきました。両校とも、政財官など各界へ傑出した人材を輩出しています。が、同時に美術の分野でも多彩な天才たちを生み出したことが知られています。



福岡県立中学明善校

例えば、修猷館からは、洋画の吉田博や和田三造、児島善三郎、中村研一、中村琢二、彫刻の安永良徳、日本画の水之上泰生など。明善からは、洋画の青木繁や古賀春江、高島野十郎、藤田吉香、松本英一郎、版画の藤森静雄、工芸の豊田勝秋など。日本を代表する美術家も多数存在する。そうそうたる顔ぶれとつながりは、まるで筑前と筑後に並び立つ2つの山脈を見るかのようです。

2つの美術山脈

修猷館と明善に集った美術家たち

第一章 先駆者たちの時代

第一章 先駆者たちの時代
県立学校として草創期の明治中期に、両校で学んだ美術家たちに焦点を当てた。

修猷館は、吉田博、和田三造という、その後大正、昭和に至るまで、幅広い活躍を展開する画家を送り出した。

明善では、青木繁という不世出の天才画家を生んだ。その先輩に当たる松本豊太とともに、洋画王国・久留米の基礎が築かれる時代の一端を紹介した。

ここで修猷館の和田三造、明善の青木繁の接点とその後注目してみよう。ほぼ同年代、いずれも県立中学を中退して上京、東京美術学校西洋画科選科に学んで、明治三十七年(一九〇四)の同期卒業という二人である。当然ながら同級生として交友があったが、その後の歩みはあまりにも対照的である。

青木は白馬会展での活躍、《海の幸》や《わたつみのいるこの宮》の発表と、脚光を浴び一躍スターに上りつめたかと思われたが、その直後に父の危篤による帰郷、さらに初の官設展である第一回文部省美術展覧会(文展)での落選と、明治四〇年の夏頃を境に運命は暗転し、失意と放浪の果てわずか二九歳で早世するという悲劇的な人生を送る。



青木繁《輪転》明治36年(1903)
石橋財団石橋美術館蔵

第二章 青木繁の伝説を追って

だが、青木はその後、明治浪漫派を代表する、夭折の天才として歴史に名が刻まれる。一方で和田は欧州留学の合間に他分野への興味を広まり、洋画のみならず図案や工芸、日本画、色彩研究、映画の舞台美術など、驚異的なほど多彩な方面で活躍する芸術家として生涯を送った。そのような二人が、ほぼ同じ頃に両校に学んでいたという事実もふまえておきたい。



青木繁《わたつみのいるこの宮(下絵)》明治三二(一九〇七)
福岡県立美術館蔵

第三章 個性的な指導者

修猷館、明善の両校で指導に当たった美術教員は多数にのぼる。教員の赴任が契機となって、美術の指導体制が整い、美術の道を志望する生徒に強く影響を与えるようになったのは、明善では山村秀一(一九二六〜一九五六在職)修猷館では田中致美(一九三七〜一九六三在職)と言えるのではないかと。

山村秀一赴任後の美術部については、のちに美術批評の頂点を極めた河北倫明の回想などに当時の雰囲気やうかがうことができる。河北や植橋満帆ら以降の世代は、山村の深い薫陶を受け、明善を巣立っていた。

修猷館の田中致美は、人間教育をモットーに、生徒の指導に情熱を注ぎ込み、カラスの愛称で親しまれた。その最初期の教え子であった古川吉重をはじめ、数多くの生徒に恩師として敬愛される教師生活を送った。その情熱は次代の河原大輔へ引き継がれた。

第四章 新たな時代へ

戦中戦後の時期に学んだ画家や彫刻の分野で存在感を示した作家など、新たな世代の多彩な美術家たちを「観いた」だきたい。

明善では彫塑から陶芸に転じ、鳥を主題に作陶を重ねた城下久実のほか、スペイン留学を経て安井賞を受賞した藤田吉香、《退屈な風景》シリーズなどで現実と非現実とが複合された作風を展開した松本英一郎、松本と同期で「漂泊の画家」と称された清田英作という、久留米洋画壇の伝統を強く受け継ぎながら、いずれも独自の具象絵画の世界を築いた3人の洋画家を紹介した。

第四回明善大同窓会 開催のご案内

「明善」未来を拓く 私たちのキーワード
時代を超え地域を超えて 広がる明善同窓生の輪。大同窓会はそのように幅広く活躍する同窓生が一堂に会し、縦横に交流できるまたとないチャンスです。老いも若きも明善の未来に思いを馳せ、心おきなく懇親の時を持っていたきたいという一心ですべての準備をして参りました。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

日時 平成二十三年十月二二日(土) 午後二時半より

場所 ホテルマリタール創世 (久留米市東櫛原町) 電話 〇九四二-三五-三五一

会費 五、〇〇〇円 当番 昭和五一年卒業生一同

事務局だより

就職、転勤、退職などで住所が変わった方、どうぞ事務局までご連絡ください。

H23年度より終身会費が18,000円となりました。終身会員への加入、どうぞよろしくお願いたします。

電話、FAX、メールで受け付けています。

開館日 月・火・木・金(午前10:00~午後4:00)

E-mail: meizen@kurume.ktarn.or.jp

TEL:0942-33-6546 FAX:0942-35-1249

次ページへ↓